まちニュース

川前で〝拠点〟づくり
住み慣れた地域で暮らし続けよう

年々出生数が減少し、高齢化が進展している国内。特に中山間地は深刻で、とりわけ高齢の住民が生活を維持していくためには課題が山積。

そんな中、人口約千人、高齢化率五〇％を超える川前町で、暮らしや福祉のベースとなる「小さな拠点」づくりが進んでいる。取り組むのは、地域住民らで組織するNPO法人「おおか」（永山正一理事長）。同町三地区（小白井、桶売、川前）の頭文字から取った法人名で、「町での生活を『謳（おう）歌』しよう」との願いも込めた。

同町下桶売地区、県道359号沿いにある一軒の古民家が将来の拠点。現在、改修作業を進めており、六月頃の運営開始を目指している。診療所や介護施設、飲食店がなく、冬は雪に閉ざされる同地域で、人が集まり支えあい、より良く暮らすための拠点をつくっていく計画。

具体的には、交流の場や困りごと相談と支援の場にするとともに、コミュニティーカフェの運営なども検討中という。

川前公民館で昨年行われた、NPO設立に向けた会議

QRコード

元自民幹事長
古賀氏が5月に講演会

古賀氏

元自民党幹事長、古賀誠氏を招いての講演会は五月十四日午後一時半から、市文化センターで開かれる。主な演題は「母を語る・政治家　野中広務を語る私の政治信条」。同氏講演会実行委員会主催。参加費は五百円。

古賀氏は、福岡県生まれ、八十二歳。一九八〇（昭和五十五）年六月の第三十六回衆議院選挙で当選して以来、連続十期務めた。この間、運輸大臣、総合交通対策担当大臣、自民党国会対策委員長、自民党幹事長、自民党選挙対策委員長、宏池会会長、日本遺族会会長を歴任。

先の大戦で父親がフィリピンで戦死。姉と二人、母親の手一つで育てられた古賀氏は、苦労の末、政治の世界に入り、各種政策に尽力。また、同じく元自民党幹事長の故野中広務氏とは〝子弟〟の間柄としても知られている。

講演会では、幼少時の実体験や野中氏との交流関係のほか、自らの政治信条についても披露する予定。

詳しくは、共催事務局のいわき文化のひろば（電話〇二四六―九二―三〇九九＝矢吹道徳さん）まで。

同NPOは四月下旬まで、インターネットで改修資金を集めるクラウドファンディングを実施。「住み慣れた地域で暮らし続けられるようにしたい」と、理念を発信している。

問い合わせは、同NPO（電話〇九〇―二二七〇―四五九三）まで。クラウドファンディングの詳細は、QRコードから。

おさかなフェス
会場は〝大入り〟
20店がズラリ並ぶ

海産物に親しむイベント「いわき七浜おさかなフェスティバル」が三月五日、小名浜、いわきら・ら・ミュウとアクアマリンパークで行われ、大勢の人たちでにぎわった。

毎月七日を「魚食の日（いわき七浜さかなの日）」とする条例が令和二（二〇二〇）年に制定されたことを受け、コロナ禍の中断などを経て、市が初開催。

西シェフの「サンマのつみれ汁」には長蛇の列

この日は、テントやキッチンカーで地元の飲食店など二十店舗が出店。「さんまポーポー焼き」や「ほっき飯」など、地域ブランド「常磐もの」を使った味覚がズラリと並んだ。

サッカー日本代表専属シェフ西芳照さんと、内田広之いわき市長のリモートトークといった多彩なステージイベントが会場を盛り上げ、パネル展示なども行われた。

また、西シェフがサッカーW杯カタール大会で提供し、好評を博した「サンマのつみれ汁」の振る舞いには長蛇の列ができ、来場者たちが〝日本代表の味〟に舌鼓を打っていた。

保険調剤

プログリーン
筑後種クロレラ
ヤクケンバイオリンク
酵華
サメミロン
カネボウ化粧品
リサージ

“ふれ合いの健康ひろば”
エンゼル薬局
いわき市小名浜玉川町東18−16
Tel.Fax.58−3603　自宅58−4465
AM9:30～PM6:30 定休日・毎週日曜、祝日